

65 私とカラヴァッジョ

《聖マタイの召命》との出会い

2024

真鍋友範

1 出会いまでの経緯

2001年頃、当時の私は関東地方某県立高校の美術教諭であった。

まだ30代の後半であり、3校目の公立勤務校に務めており、美術教育への情熱を熱く抱いていた時期であった。

この時期に赴任したのが、美術コースや音楽コース、体育コース、外国語コースを、普通科と並行して持つ某県某高等学校であった。

全国的には美術専門高校の方が普通だ。美術コースを他のコースと並置することに意義を見つけて、県が設置したことは理解できる。

が、コース教育というものは、あまりにも中途半端な方向の教育であった。

専門に大学でも美術を学びたい生徒、興味はあるが進路までは考えていない生徒、単に通学に便利で近かっただけの目的のない生徒、とりあえず高校生時代に美術も楽しみながら目的の文系進路に進みたい生徒が、同じコースのクラス内にいる。

美術教育到達の目標をどう定めるのか。成果をどう判断するのか。

ただ楽しく美術中心の高校生活を送らせてあげれば、本人も保護者様も満足なのか。ひどく悩ましいところであった。

ところが、その後になり、県は新しいタイプの《芸術科》という科目を開設し、新たに再出発するという。

美術科ではなく、芸術科。芸術科音楽と、芸術科美術という訳だ。

完全な専門科目名では無い、中途半端な設置スタイルである。音楽と美術が同じ芸術科という屋根の下に置かれるユニークなスタイルであったが、音楽科、美術科と分離しないことに、どのような利点があるのか、当時は新たな疑問が残った。専門性が弱まると感じたからだ。

しかし、良い点もいくつかあった。他のコースの教育システムを学び、取り入れることができたのだ。

当時、外国語コースでは、海外姉妹校交流という行事を、隔年でオーストラリアや米国の高校と行っていた。

外国語コースの教諭に、なぜ外国語コースは、修学旅行ではない海外姉妹校交流を実施出来るのか、伺った。

すると、短期間の国際交流は、文科省認可の民間公認交流団体が介在すれば可能との回答を得たのだった。(現在はシステムも変更されていると思われる。)

そこで、リストにある交流仲介団体を3件リストアップし連絡したところ、1件のみ前向きな回答を得られた。ここでは相手をB財団としておく。

芸術科美術コースにとって、希望の交流希望国は、もちろんイタリアだ。理由は言うまでもなく、ルネサンス・バロック美術の宝庫だからだ。

しかし、音楽コースと足並みを揃えないと、芸術科としての体験行事は成立しない。『一緒に国際交流をしませんか』と音楽コースの教諭に働きかけた。

音楽の場合だとオーストリア・ハンガリーが候補であると、音楽教諭から即座に返答があった。

B財団担当者と相談し、イタリア・フィレンツェ郊外の国立某美術専門高校と交流し、かつ、訪問各都市にある美術館、制動などを廻るというプランを練り上げた。

校内での承認を取り付け、準備に2年かけたのだった。

こうして、2年後に実施したのが、《イタリア姉妹校交流実施に向けた海外研修旅行》(10日～11日間)であった。

この行事成功の為にさらにシステムを築いた。1年次には、イタリア語を参加交流生徒については必須選択科目とすることで、海外研修が国際観光旅行ではない実のある研修旅行となるよう配慮した。(*ただし美術大学の入試科目にはないのは残念。)外国語コースに対し、美術・音楽コース生徒の選択を前提にイタリア語の講座を設定していただいた。これは複数コース併設の利点であった。

そして、美術を愛してやまない生徒達とともにイタリア各都市や美術館・聖堂を巡回し、ルネサンス・バロック美術史にでる有名な建築・絵画・彫刻などを存分に鑑賞した。

このような経緯で始まったのだが、《イタリア海外姉妹校交流》であった。

観賞コースは毎年度若干修正されたが、ローマを訪問したときは必ず訪れる聖堂があった。市内ナボーナ広場近くのサン・ルイージ・デイ・フランチェージ聖堂だ。

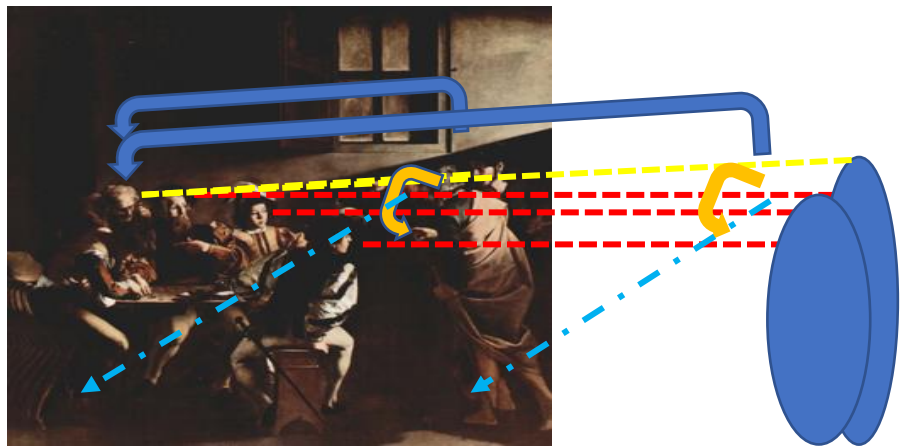
もちろん、ここでの鑑賞目的は、コンタレッリ礼拝堂コーナーにあるカラヴァ

ッジョの出世作《聖マタイの召命》鑑賞の為であった。

2 出会い

そこで、ローマ市公式のガイドさんによる説明を受けた。

【イエスが指差したが、不鮮明な指差しであった為、ヒゲの男が問い返した場面】という解説であった。召命は完結していない。中途場面ということになる。



《聖マタイの召命》1600 カラヴァッジョ 実際のイエス・ペテロ

イタリア国内では、この絵画の解説として、上記内容が通説と認識されているらしい。

しかし、【私はその時の説明が、どうしても腑に落ちなかった。】

この何ともすっきりしない、【説明不可能な違和感】が、その後も数年間は心の片隅に残り続けていた。

どうしても真実を知りたいという想いは、やがて2012年を迎え本格的調べようと考え始めた。ただし、過去の美術史家の説を聞いて納得するのではなく、あくまで【自分の目で見えて納得することが大切】だと、再検証への方向性を定めた。

まず、【ヒゲの男の親指はなぜ立っているのか。】これに答えたドイツ学派の説明はない。何故なら、彼らは無視しているのだ。

カラヴァッジョは、私の見立てでは、【表現上必要なものは全て描きこみ、不必要なものは極力廃している】。

【何故親指を描いたのか。】

その答えは、【2段階の連続質問動作であった為必要な動作であった為】なのだ。

この場面では、イエスが先に呼び出したのではなく、ヒゲ男の方が先に質問し

ている。

「お探しの人は、私ですか、それとも隣の人ですか」、が左手の連続動作で表現されている。

間違っ**て**はいけないのは、ヒゲ男の人差し指は、明確に隣のメガネ男を指差していることだ。(デッサン上、絶対にうつむいた若い収税吏ではない。)

質問を受けたイエスは、3段階の連続回答動作で答えている。

まず、答える意思を、開いた左手で表す。

続**いて**の動作は、あなたがイエスと同じポーズをとると解る。

【右足を左側に一步踏み出す動作の意味】は、視点移動し、【メガネ男の顔をよく見える位置に、イエスが立ち位置を移動した動作】であったのだ。

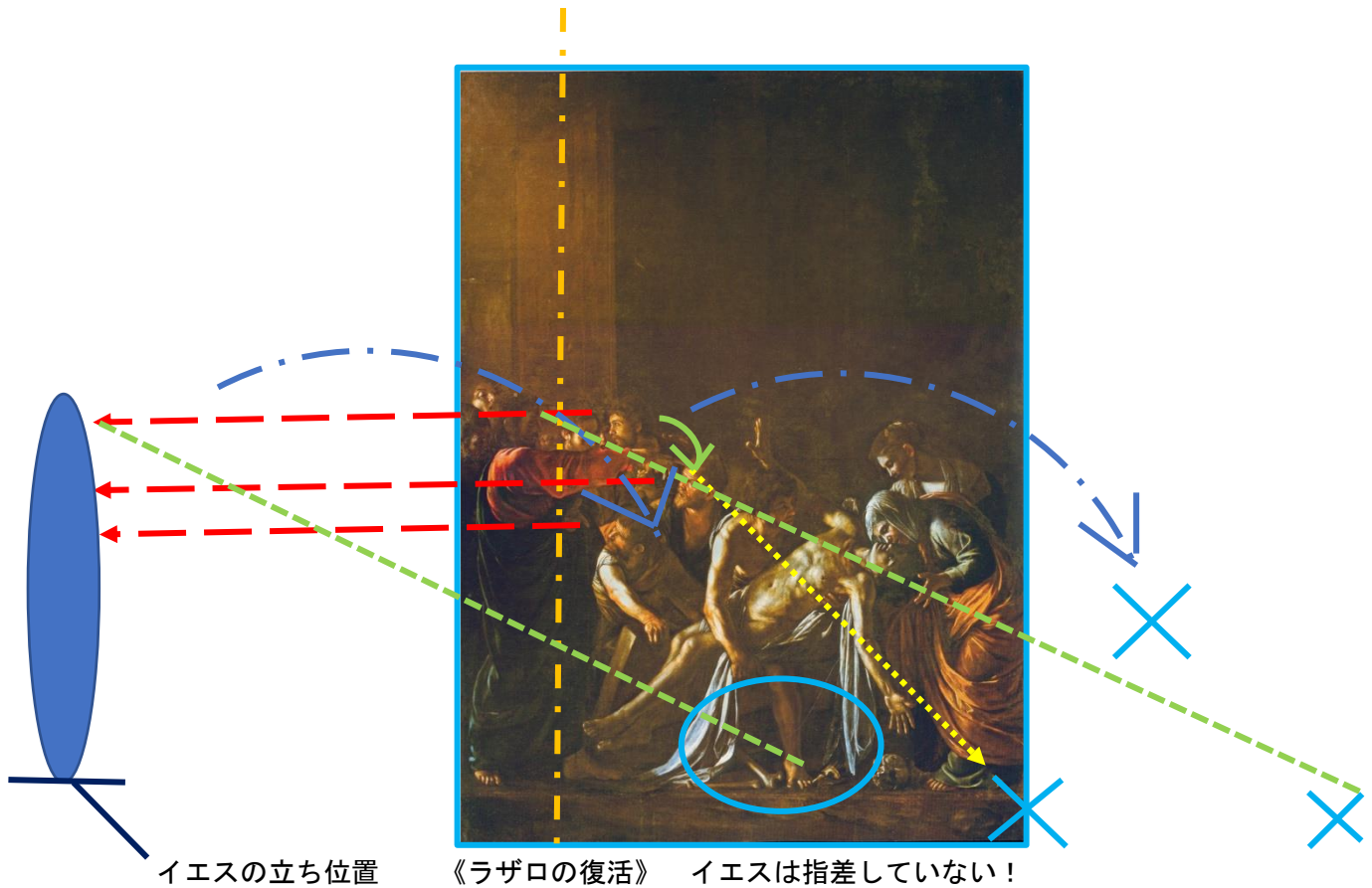
関西のとある国立大学教授は、これを【イエスは帰ろうとして足を踏み出した】と誤解している。まだ召命も終わらないのに、【帰る】とは、理解に苦しむ解説だ。

イエスは、指差していない。イエスは力なく指差したのではない。イエスは下方を指差したのでもない。【イエスは上腕をゆっくり回したのだ。】

カラヴァッジョが描いているのは、システィーナ礼拝堂のアダムを真似た腕ではない。(これを例に挙げた誤解説は実に多い。)

カラヴァッジョは、イエスの腕を回す動作により、【向こう側の人】、つまり、メガネ男と明確に断定しているのだ。

カラヴァッジョの描いた《ラザロの復活》でも、状況は同じで、そこでも【指差していない。イエスは腕を回して、向こう側を掘るよう指示している。】



イエスの立ち位置 《ラザロの復活》 イエスは指差していない!

絵が読めない人は、この場面が横長の場面の【左右空間を圧縮表現している】状況そのものが、読み取れない。

【イエスは、画面の外側、はるか左側に立っている】のだ。何故そう言えるのか。それは【墓掘り人夫のイエスを見る視線】があるからだ。

これらの内容を即座に理解できない美術史家は、もう解説するのを辞めた方が良いでしょう。

イエスが、画面外左側で腕を回して、『あそこを掘りなさい。』と指示したなら、ラザロの墓は、画面中央部分となり、絵画内容と一致する。

イエスの視線も、廻した腕の先の手の甲と、イエス自身の視点を結ぶ線の先になる。(グリーン点線)

したがって、【左右画面圧縮技法】を考慮して《ラザロの復活》を見ると、カラヴァッジョは非常に正確に、かつ写実的に描いていることが分かる。

3 カラヴァッジョに教えられたこと。

リアリズム描写への細部のこだわりが、中途半端ではないこと。真実の姿を追求した結果、描かれた身体描写を解析すると、人物の内面の意図が正確に読み取れるのだ。

レオナルド・ダ・ヴィンチからジョルジョーネに伝わった【人物の内面を描くことの価値観】は、カラヴァッジョの時代になり、更にリアリズム表現の磨きがかかり、その結果、【科学的な観点から合理的に判断し、絵画を動画として構築する】という、新たな絵画視点を美術世界に広げたのだ。

この新たに広がったリアリズムの絵画技法において、イタリア内の多数のカラヴァッジェスキに限らず、広くヨーロッパ地域のバロック画家たちに深い影響を残したことを、我々は忘れてはならないのだろう。